

2020年の最大のニュースは、残念ながら新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の地球規模の拡大となっていました。日本で開催が予定されていたオリンピックが延期となり、郡山で開催予定だった第18回日本小児がん看護学会学術集会（福島県立医科大学看護学部 古橋知子会長）も、カナダのオタワで開催予定だった国際小児がん学会（SIOP）2020もオンライン開催（virtual congress）となりました。

2019年12月に中国武漢において、初の感染が報じられたのち、いろいろな研究が行われたり、人々の対応の仕方も変わってきたりしてきました。2020年3月8日までを観察期間とした武漢こども病院からの感染拡大初期のレポートで、1月28日から2月26日までの約1か月間の子ども（0-15歳）の感染者は171例で、観察期間に人工呼吸器を要するほど重症化した者は3例、転帰としては1例が死亡、21例が症状安定して一般病棟に入院中、149例が退院したということでした。重症化した3例中1例が、維持療法中の白血病症例だったということで（Lu X, et al, N Engl J Med, 2020.）、感染拡大の早期から、小児がんの重症化リスクに注意が向けられたということがあったと思います。

SIOPの看護委員長のリサ・モリッシー（Lisa Morrissey）も加わって、SIOPや小児がん研究グループ（COG）、国際小児がん親の会（CCI）などが、これまでのエビデンスや最近の経験で妥当であろうと考えられる対応を共同でまとめたレポートがあります（Sullivan M, et al, Pediatr Blood Cancer, 2020）。看護師は患者やスタッフをCOVID-19の感染から護り、保護者を教育したり監督したり、スタッフを支援するという重要な役割を担っていること、とりわけがん看護に関わる看護師は、抗がん剤からの被曝のリスクとCOVID-19の感染のリスクの2つの危険から子どもと家族を護るという大役に取り組んでいること、通院時の感染リスクを心配したりCOVID-19禍であっても治療を継続できるのかと不確実性や不安感を高めている家族には、病院の待合室に滞在する時間が最小限で済むようにあらかじめ電話で問診を行うなどの具体的な工夫を行うとともに、これまでと同等のコミュニケーションを心がけることなどが示され、また地域の親の会への紹介が推奨されています。

私の研究室のお隣の病棟でも、家族面会が特定の一人だけに制限され、プレイルームは使用できず、食事も部屋食のみ、特別支援学校の分教室（院内学級）にも登校できないという制限の多い環境の中で、何人もの子どもたちが小児がんの治療を受けながら生活を送っています。それでも看護学実習の学生がプレイルームから選んできた遊具に夢中になったり、部屋ごとに廊下を歩いてよい時間帯にハロウィンの飾りつけに驚いてはしゃいだり、院内学級のオンライン授業に目を輝かせて自信に満ちた表情をした瞬間を見るにつけ、私たち医療チームが子どもたちや家族の療養環境を整えるためにできることがもっとあるのではないかと励まされている気がします。長く続くウィズ・コロナの時代ではありますが、健康に、そして小さな幸せを集めながら小さな工夫を積み重ねて、小児がん看護の仕事を続けていくことに、大きな意味があるのではないのでしょうか。

日本小児がん看護学会

理事長 上別府 圭 子